

200号記念号「堂々川;人も自然も生きている」

2021(令和3)年8月27日 堂々川ホタル同好会情報紙 2021年度第4号

1. 今回の会報は2006年4月に創刊した会報第1号から数えて15年間続いた200号。
初年度タイトルは「ホタル恋」。ホタルよ! 沢山飛んでくれ、ホタル来いの願望込め
2. 8月22日、8月の定例会に会員19人が参加。彼岸花植栽地の草刈りや咲き始めた彼岸花の花色を看板に掲げる為に5番川原の寒水寺さん参道出口に設置した。花色は既に10色咲いている。今回は特別に早く咲いたので堂々公園内の草刈りをした
3. 8月24日の水質調査はコロナ蔓延防止対策の為に中止した。
4. 福山大学学生と共同で堂々川の生物調査を行い、マップを作ることが決まった。
この調査隊名を「砂留アイドル7」と名付けて活動、砂留女史と共に会をPRする。
5. 昭和40年代には存在していた水車をオブジェとして設置し、堂々川をアピール
6. RCCさんの8月31日ラジオ放送他、彼岸花の取材依頼がもう数件入っています
7. 目で見える事例



雨模様の1番砂留付近に集合



彼岸花の里入り口へ水車を設置



1年ぶり捕獲 悪さをする猪



堂々公園内小川付近の草刈り



鳶が迫谷斜面の草刈り



内広砂留⇒堂々公園出口のごみ清掃



サワガニ (綺麗な水に住む)



福大「砂留アイドル7」の皆さん



砂留女史の名前「子から史に変更」

6. 次回定例会 集合時間場所 9月 12日(日) 8時00分~11時00分
作業内容 ごみ拾い・草刈り(公園から林道.4.5番川原)と草除去
自然観察(彼岸花観察含む)

定例会はどなたでも参加できます。参加者は保険に入る為名簿にお名前を記入して!

7. 発行責任者 堂々川ホタル同好会 会長 土肥 徳之

砂留研究会レポート

全国の「堂々川」を巡り歩いています

砂留研究会 蒲原潤一



今回は記念すべき 200 号に近況を報告する榮譽を頂きました。私は砂防を専門とする行政官で皆さんのご縁は広島県庁に勤務した平成 21 年頃に始まります。当時、砂留に感動したのがきっかけで勉強を始めて、今では土木遺産全般、もっと言うと先人の足跡を訪ねること全般が趣味のようになっています。土肥会長には、当時、三原で開催した土砂災害防止県民の集いで講演いただいたり、その後も全国砂留サミットで福山に呼んで頂いたりとお世話になっています。私がどこにいても会報によってホテルや彼岸花の季節感あふれる便りを届けて下さり、砂留を庭として多くの会員・来訪者皆さんが活動の時間や熱い想いを共にされていることに思いを馳せては喜んだり励まされたりしています。平成 22 年は土砂災害防止全国の集いに合わせて砂留の模型を製作しました。今も御野小学校で展示されていると聞いてとてもうれしく思っています。

さて、広島を離れてからは、長野県や茨城県つくば市などに転居し、この 3 月までは国土交通省などの勤務で東京に、この 4 月からは鳥取県庁に勤務しています。本報では私が最近の勤務地の東京や鳥取でも「堂々川」的なものに触れていることを紹介します。

皆さんは江戸期の浮世絵に堰が多く描かれていることをご存じでしょうか。広重「虎の門あふひ坂」(港区虎ノ門(地名も溜池))、広重「王子音無川堰堤世俗大瀧ト唱」(北区王子)、江戸名所図会「目白下大洗堰」(文京区関口)などです。道灌や家康を代表とするたゆまぬインフラ整備のうえに江戸の

街の発展があったことは知られています。私としてはコロナ禍で遠出できない時期を今も残る高低差を現地で確認したり、図書館で古い写真を探したりして過ごしていました。場所によっては構造の図面が残っていたり、堰が傾いているのを下流から懸命につかえ棒で支えたりしている明治期の写真が残っていたりと発見は尽きません。鳥取に来てからは江戸時代の水道施設の遺構が残っているときいて余水吐らしき構造物【写真】を現地で見つけました。城下に流れ込む水道谷と呼ばれる溪流には溜池が今も二つ。洪水時の余水の処理は決壊事故を起こさないための大きな懸案だったのだと想像しています。川の中に土木の技術で高低差を永続的にキープして取水に役立てたかった先人の切実な願い。それは堂々川砂留と共通するものです。堂々川の砂留のようなものがかつて在ったのだと想像しながら、時に都会の喧噪の中に、時に熊や猪の出没情報に怯えながら、一人現地身を置くことは私の密かな愉しみとなっているのです。やや余談ですが、浮世絵の堰の中には江戸時代に「どんどん」と呼ばれていたものがあります。各地の用水路などの現代の落差工も昔は「どんどん」と呼ばれていた場合も多いようです。堂々川もドウドウと音を立てて流れる様子からの地名だそうです。そう言えば砂防工事を行うような急流河川では時折、ドウメキ、ドドメキ、トドロキなどの地名を見かけます。昔の人が音が鳴ることを感じた達成感なのか恐怖感なのか、堂々川の名称に込められた心意が全国共通であることも興味深いです。

ところで司馬遼太郎は国府について以下のように記しています。「美田の真只中に置く以上、川はそばに流れている。ときに氾濫する。が、できれば小規模の氾濫であってほしい、という虫のよさが、千代川のような大河に国府を近づけなくしている。諸国の国府は大河のそばになく、支流の小さな扇状地にあるのがふつうで…」と。国府ではありませんが堂々川も備後国分寺があって古くから人々が行き交い高度な土木技術が駆使された地だと思います。皆さんが古墳などを含めて堂々川の地にロマンを探求されていること。土木技術の中でも大河川向けの治水ではなく砂防の技術が重用されていたこと。古代と灌漑と砂留と砂防。これらに強い繋がりを私は感じています。

土木遺産を探求することは地域の個性を理解することだと思います。堂々川と清水川の水系で大原池を境に利水と治水の系統を変えたのはいつの時代なのか、古い絵図に砂留と溜池とが区別して描かれていますがどのような構造上の違いがあったのか、砂留築造と福山城下の取水との関係など、興味は尽きません。若い世代の皆さんも含めて堂々川をフィールドとして楽しい発見や交流が今後も続くことを願っています。そして離れていても皆さんの活動に栄養をもらいながら、全国で「堂々川」的なものを追いかけている自称ロマンチスト達の輪が今後も広がっていくことを願っています。



地域の安全を守る堂々川の砂留



綺麗を守るシンボル彼岸花



登録有形文化財の砂留を守る人たち

私たちは「ホテルと花と砂留と」の活動を通して堂々川を守るボランティアです。